

#35 家族のつながりと住まい

わが家らしい 「近居、スタイルを 見つけよう！」



家族のつながりや互いにサポートし合える関係を大切に暮らしたい…。

でも同居となると、不安や抵抗感を持つ人も少なくありません。

そこで近ごろ注目されているのが「近居、という選択。

いつも一緒ではなく、ほどよい距離感で互いの生活を尊重しながら上手にサポートし合う住まい方です。

ただ、ひとことで「近居、と言っても、そのスタイルは実にバリエーション豊富で家族ごとにベストアンサーは異なります。

今号では、積水ハウス・総合住宅研究所が取り組む「近居のライフスタイル研究」をもとに、

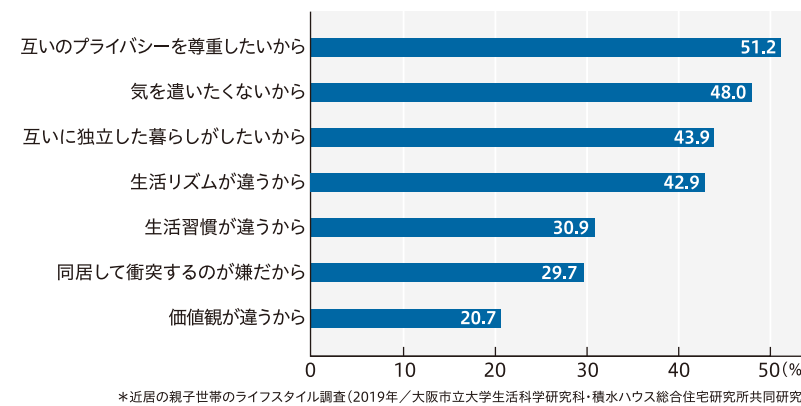
わが家らしい近居スタイルを見つけるヒントやノウハウをご紹介します。

「同居or近居」の 「二者択一」ではありません。

独立した暮らしやプライバシーの尊重、生活リズムの違いなど。確かに近居は、同居で悩みどころとなる課題をクリアしやすい住まい方だと言えます。ただ、同居でも住まいの工夫次第でさまざまな解決策が考えられ、逆に近居でも互いの住まいの距離やサポートの仕方などで多彩なパターンが考えられます。

実は、同居も近居も「家族で暮らす」という視点で捉えれば、距離感が違うだけで同じ思いの上にある住まい方のスタイル。最初から「同居か、近居か」という二者択一ではなく、まず「家族のつながり方」をどう

同居ではなく近居を選択した理由



家族が近くにいると「安心感」が、近居の最大のメリットのひとつ。万一の時や困った時に頼れる存在が身近にあるのは何かと心強いものですね。

さらに日常の暮らしでもメリットは多く、家事や子育てのサポートは特に共働きの世帯にとっては頼もしく、親世帯にとっては楽しみや生きがいを育むことにもつながります。また、食材や日用品のまとめ買いで互いに家計を節約できるという経済面でのメリットが得やすいのも魅力です。

そして将来的に親世帯が高齢になった時には、病院への付き添いや身のまわりの世話など、近くに暮らしているからこそ支援できることも少なくありません。

このようにメリットの多い近居ですが、デメリットがあることもきちんと知っておくことが大切です。

たとえば、行き来しやすい距離だから「突然の訪問」ということもありがち。親

うしたいか、自分たちの暮らし方の理想像を思い描くことが大切になります。

具体的にサポートしたいことやサポートされたいことを考え、その場面や頻度などを思い浮かべれば、住まいの在り方もイメージしやすくなります。もちろん今のことだけでなく、10年後20年後の将来の家族像やライフシーンを見据えておくことも肝心です。

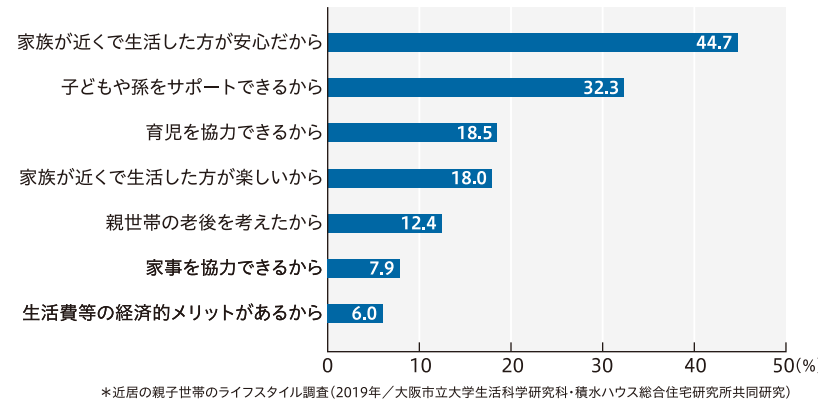
このように「わが家なりの家族のつながり方＝理想像」をしっかりと意識しておくことが、同居でも近居でも住まい方のベストアンサーに大きく近づくこととなります。

近居のメリットと 不満につながるタネ。

近居のメリット

- 安心感 → 互いに駆けつけやすい
- 家事支援 → 協力し合いやすい
- 子育て支援 → 頼りやすい
- 家計面 → シェアしやすい
- 老後支援 → 見守りやすい

近居を始めたきっかけ



近居スタイルは時間距離で違ってくる。

さて、近居というどのくらいの距離感をイメージされるでしょうか。公的機関の指針によると、時間距離(交通手段に関係なく、行き来に要する片道の時間)で60分以内とされているようですが、仮に車で60分かるとなると少し離れすぎているようにも思いますよね。

では実際に時間距離によって、近居ライフはどのように変わってくるのでしょうか。近居中の家族を対象に、時間距離(15分以内、30分以内、60分以内)の調査を行なうと、行き来の頻度やメリットの実感面などに違いが現れました。

たとえば、行き来の頻度は断然15分以内



ただ、これらはデメリットというより不満につながるタネのようなもの。近居をスタートする時点で、家族でよく話し合っただけで共有しておけば、上手に回避できる課題と言えるでしょう。

の近居が高く、近居して良かったとメリットを実感している家族も多い様子。満足度も時間距離が短くなるにつれて高まる傾向にあります。

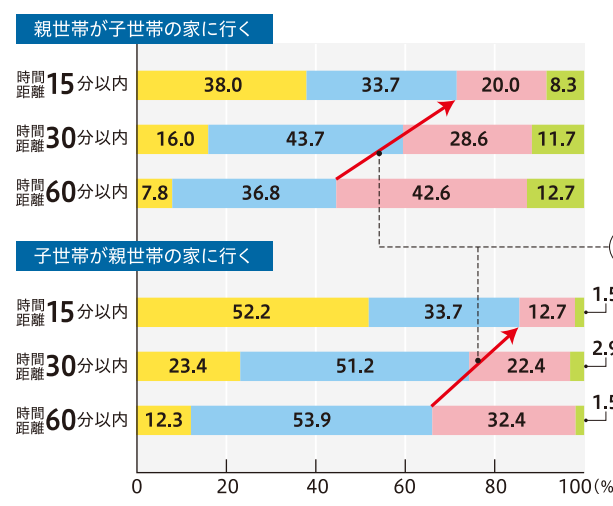
また、時間距離が長い近居スタイルでは、「食事」「行事」が行き来の目的として増加するのが特徴。家族が集まってイベントを楽しむと言ったライフシーンが想像できます。

近い遠いは個人の感覚によっても異なり、今の住まいの状況、親子世帯ともに同じ地域に居住、親子世帯は故郷で子世帯は都心に居住などによっても違うものですが、大切

なのはこれからどのような家族のつながりと共助を目指すのかということ。理想のライフシーンをイメージして、自分たちにマッチした時間距離を検討してみてください。

時間距離と行き来の頻度

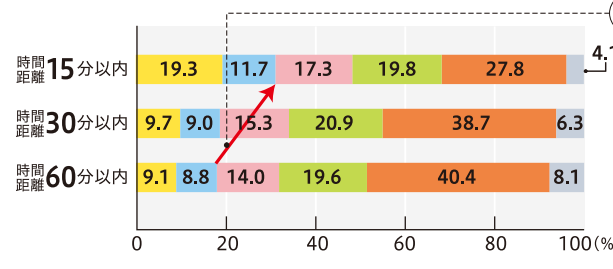
■ 週1回以上 ■ 月1回以上 ■ 4~5ヶ月に1回以上 ■ 半年に1回以下



近ければ行き来も日常的に!

近居して良かったことの数

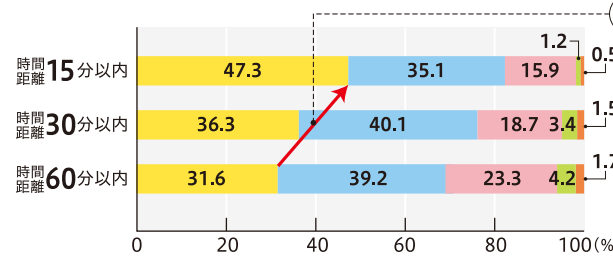
■ 5個 ■ 4個 ■ 3個 ■ 2個 ■ 1個 ■ 0個



時間距離が短いほどメリットを実感!

近居の満足度

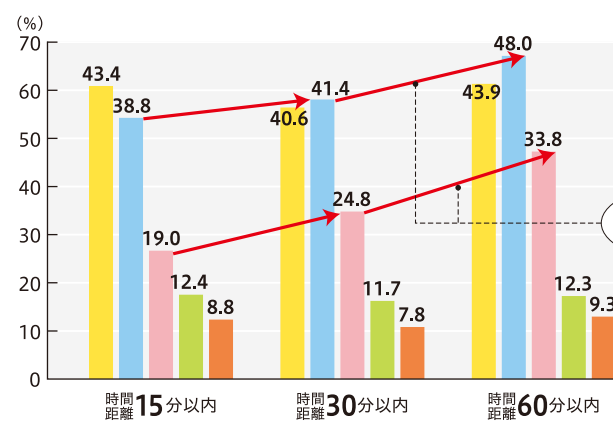
■ 大変満足 ■ やや満足 ■ どちらとも言えない ■ やや不満 ■ 大変不満



時間距離が短いほど満足度もアップ!

行き来の目的

■ おしゃべり ■ 食事 ■ 行事 ■ 家事支援 ■ 相談



時間距離が長いと食事や行事が増加!

*近居の親子世帯のライフスタイル調査(2019年/大阪市立大学生活科学研究科・積水ハウス総合住宅研究所共同調査)

満足度が高まる、アクティブ近居。

時間距離と一緒にイメージしておきたいのが、親世帯・子世帯の行き来のパターンです。大きく4パターンに集約されますが(左図)、調査を進めると互いに月2~3回以上行き来し合う「アクティブ近居」が最も満足度アップにつながる事が分かりました。その理由の第一が「互に行き来し合う」と

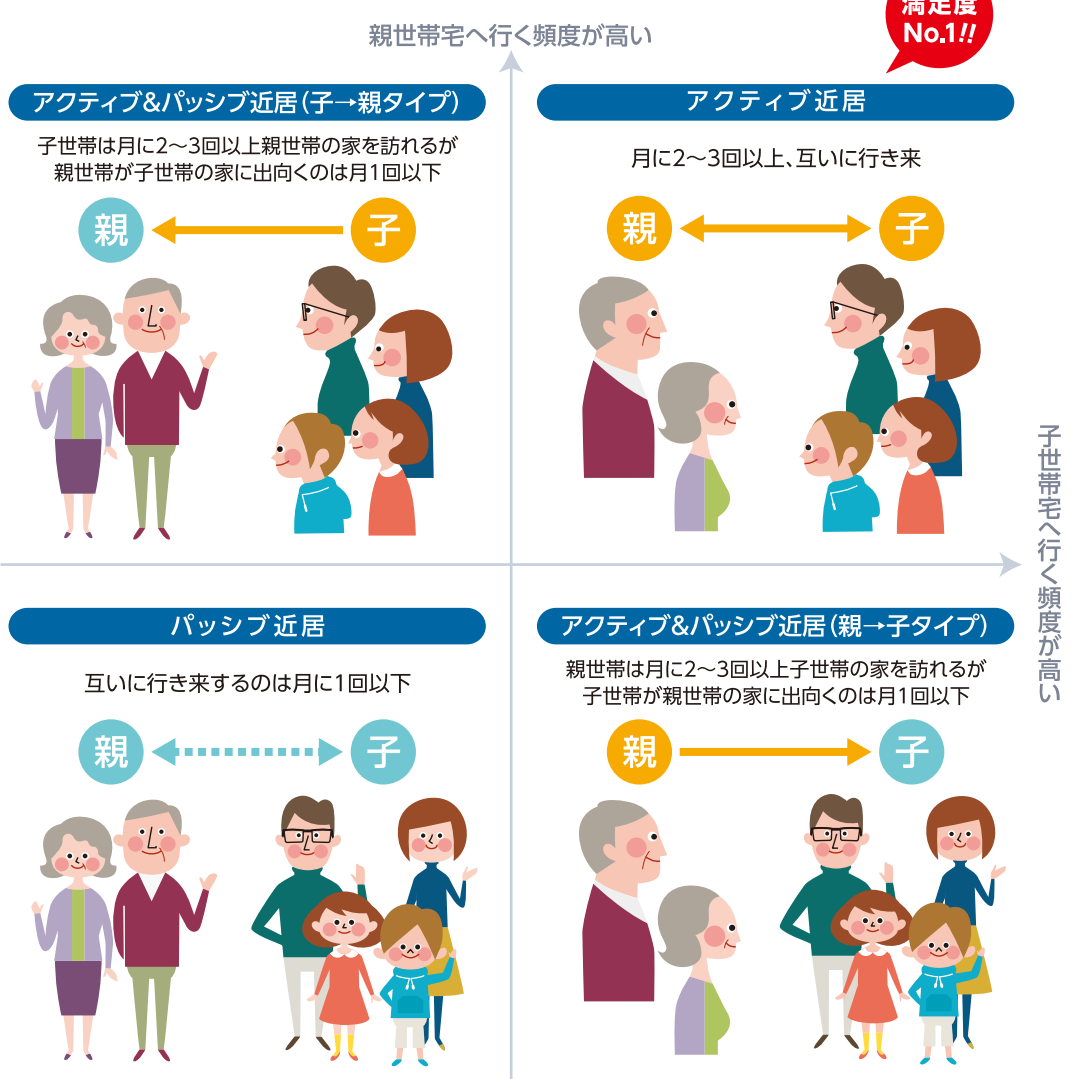
言うこと。近居家族全体では子世帯が親世帯の家を訪れるケースが多いようですが、親世帯からも出向くことで、よりイーブンな関係性を築きやすくなるようです。そして第二のポイントは「行き来の頻度。月に2~3回以上の交流があつてこそ、近居のメリットを実感しやすく、満足度が高まりやすくなります。適度な頻度で互に行き来することで、それぞれの家族が求め

ていることが分かり、ともにサポートしやすくなると言えるでしょう。また、近居をスタートさせる際も同じようなアクティブなスタンスが重要です。近居の満足度を高める時間距離15分以内を実現した家族では、どちらかの世帯が前向きに近居を提案しています。近居はスタート前もスタート後も、互いに積極的に取り組むことが成功の秘訣になります。

近居の始め方、あの手の手。

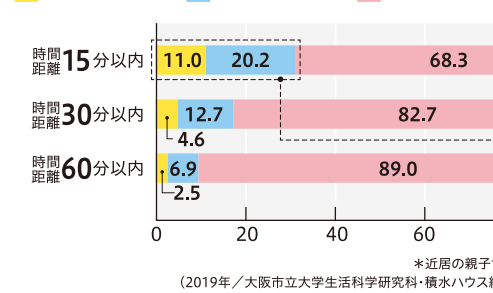
同居では既存の土地や新たに土地を確保して、そこに二世帯住宅を建てるのが一般的ですが、近居ではより多彩な住まいの力たちを選ぶのも大きな特徴です。もちろん近くに2軒分の土地が確保できれば戸建て住宅同士での近居も魅力的ですが、どちらかの世帯がマンション居住を選

両世帯の行き来で見た4つの近居パターン



時間距離と近居のきっかけ

■ 親世帯から提案 ■ 子世帯から提案 ■ 自然にそうなった ■ その他



時間距離が短いほどどちらかの世帯が積極的に近居を提案!

多彩な選択肢がある近居例



戸建て住宅と集合住宅が融合した都市開発なら近居もスムーズです。(六甲アイランドシティ/兵庫県)

大規模物件なら広さやタイプなども家族に合わせて幅広く選べます。(グランドメゾン新梅田タワー/大阪府)

近ごろ注目の自立型高齢者向け住宅(P48参照)も有効な選択肢です。(グランドマスト江古田の杜/東京都)

択したり、賃貸物件を検討するなど、理想的な時間距離の範囲内でさらに選択肢を広げることもできます。たとえば、実家の近くに建つマンションに子世帯が住み替えたり、遠い故郷で暮らす親世帯を子世帯が自分たちの住む都心エリアに呼び寄せるケースも見受けられます。

特に最近では高齢になればマンションの方が暮らしやすいという理由で、同じ物件内で近居を実現する家族も増えてきています。実は親世帯・子世帯が近隣に別々の不動産を持つことは、いずれどちらかの住まい方が変わった時にも融通が効きやすい面が

あります。子ども(孫)が独立して同居家族が減ったり、親世帯が高齢者住宅で暮らすようになったり、ライフステージの変化に合わせてベストな規模や機能を有した住まいへスムーズに住み替えていく。近居の検討もつながります。